

(1) 言語活動を通して指導すること

- ・言葉は人に伝えるための道具。自分ごとになり、伝えたいことがあれば子どもは練習する。意味のある言葉にする。
- ・言語活動の質を上げる。思考して使うために、目的・場面・状況を設定する。
- ・児童生徒の英語の学びへの空腹感をいかに作るか。伝えたい状態にすること。
- ・「言語活動を通して」とは、活用すること。学んだことを組み合わせ、自分の力で表現する。
例えば、ワークシートを見ないでキーワード、絵を用いて話すこと。そのためには、練習も必要。
ただし、同じことを繰り返すのではなく、少しずつ負荷をかけていく。
- ・単元計画で指導する内容に軽重をつける。
- ・変化をつけた言語活動を繰り返す。自己調整をするために中間指導（中間発表）を行うと子どものやる気に火が付く。
- ・ALTの参画が言語活動の充実には効果的。ALTのことを知り、そのことを単元計画に生かす。

(2) 思考力、判断力、表現力等の育成

- ・原稿を読むのではなく、自分の考えや情報などを整理し、メモなどを基に英語で表現したり、伝え合ったりする。
- ・思考力を伸ばすために、英語の授業だけでなく、他教科（国語等）の学びとも関連付ける。

(3) 知識・技能の習得

- ・知識を教えてはいるが、技能が身に付いていないことがある。
- ・4技能5領域を測るためには、Can-doリストを単元計画等で示し、パフォーマンステストを行う。
- ・意味のある練習を軽視しない。帯活動で言語活動の土台を作る。
- ・基本文を徹底的に練習することで、身近なことで自己表現する力が身に付く。

(4) ICTの活用

- ・何のために使うのか目的が大切。
- ・録画は生徒自身が振り返るために活用する。
- ・生成AIを自分の相談役にする。
(例) 英作文を書く。→生成AIアプリを用い、内容面や言語面におけるアドバイスをもらう。→学んだことを振り返る。

(5) 評価基準の客観性

- ・評価基準を明確化する。CEFR A1レベルに該当する（生徒の）パフォーマンスの映像があると分かりやすい。